
L a s t D a y s ～世界の終わりととどく声～

篠原 ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last Days ～世界の終わりとどく声～

【Nコード】

N6535E

【作者名】

篠原 ひなた

【あらすじ】

眼が覚めたら、世界が終わっていた。壊れた街、跡形もない友人の家、断絶したライフライン。・・・そのすべてに絶望しながら生きる少女の物語。

0・Choose・

こわかった。

ふくれあがつてゆく不安に、
狂わない自分がもどかしいほど。

壊れかけた部屋のなか。
独りっきりの、昼と夜。

どうして生きているのか、と
なんどもなんども問いかけて

雑音まじりの、言葉に

・・・救われた。

惜しんでくれた人がいる
いのち、だから。

だから、あたしは・・・

1・The world ended.

轟音に、たたきおこされるようにして目がさめた。

遠く、近く。

断続的に響く音にちよつと遅れるようにして、布団が揺れる。と
いうか、跳ねる。

しがみついた毛布ごと、床に投げ出されたのは次の瞬間のことだった。

したたかに腰をうった痛みで、ぼんやりとした頭が覚醒する。

何これ。地震？

戸惑いながらもとつさに頭をかばう。

寝る前に見るともなく見ていたテレビの受け売りだ。

いつか来るといわれてた都市型大地震の特集。

なんてタイムリーな番組だったんだろう。感心していたあたしの
耳に、またも轟音が響く。

その直後、目の前の冷蔵庫が宙に浮いた。もちろん、あたしも。

ワンルームで一人暮らしをしている人間が地震に遭ったとして、
家具に押しつぶされて死ぬ可能性ってどのくらい？

その思いつきに途方もない恐怖を感じて。

またしてもうちつけた腰をかばいながら、冷蔵庫から遠ざかる。
とにかく逃げ道を確保しなきゃ。

その一心で、断続的に揺れつづけるフローリングの床の上を匍匐
前進したいにはって、窓の方へ向かう。

うちのマンションのベランダには、非常用のハシゴがある。

立って動くことができないほどの揺れの中で、そんなものが使え

るのかどうか分からなかったけど、廊下に出るよりはまだ安全な気がした。だって、ここは3階で、廊下はマンションの真ん中にある。建物がつぶれたりしたら真っ先に巻き込まれるのはそこじゃないか。考える間にも、床がうねる。狂ったようにジャンプし続ける机や、パソコンやテレビなんかを横目に、じりじりと進んだ。

そうして、なんとか窓際にたどりついて、息をひとつつく。

分厚い青色のカーテンと薄いレースのカーテンをいつもするように開けはなつて、さあベランダに出ようと思った瞬間。あたしは目をぱちくりと見開く羽目に陥った。

だって、窓枠はあるのに窓ガラスがなかったのだ。

ここ、借り物なのに！

ガラスって一枚いくらだっけ？

まさか弁償？

大学の地震保険きかなかったらどうしよ・・・

とりとめのない思いつきがばくぜんと浮かんで、頭の中にたまっていく。

悲観的な方向に流れていく思考を止められずに、叫びだしかけたその時だった。

新たな轟音が遠くから響いて、床が大きくゆれて、そんなに大きくはない硬質的な音がごく近くから耳に届いたのは。

音の発信地に目をやる。

右手でつかんだままの青い生地からガラスの破片が落ちていくのが、スローモーションで目に焼きついた。

そういえば、今日の1限って必修なんだよね

遅刻したら出席点が削られちゃうんだよね

うわ、単位やばいじゃん！ 大変！！

てか、こんなこと起きるはずないし

どう考えても夢だよね、これ

現実逃避は夢のなかでも成立するのかな、と思いながら、視線を窓枠の向こうにやる。

その行動を悔やむのに、1秒もかからなかった。

焰

サイレン

舞い上がる埃

空気をつんざく爆音

目を開けていられないほどの閃光

崩れる高層ビルと、形が変わった向こうの山

ガソリンを一面にぶちまけたような、タイヤが焼け焦げたような
異臭

嘘でしょ、と頭をふる。

視界が、闇に侵蝕されていくのを感じた。

2・The Watch is going.

まどろみは、どこまでもふわふわでぬくぬくしていた。

たとえてみるなら、深い海の底のようにおだやかなところで、たゆたっているような気分。

ゆっくりと、ゆったりと浮かびあがっていく意識が息をひとつ。

こんな贅沢ぜいたく、ほかにはないなあ。

くすくす笑いながら身体を丸めて、毛布のほわほわさを堪能たんのうする。目は、まだ開けない。

朝をはじめその前の時間くらい、まったりしたっていいじゃん。ごろりと寝返りをうつて、その動きでずれちゃった毛布を首もとまで引きあげて。不意に脳裏をよぎった悪夢に苦笑いした。

つかれてるのかな。あんなリアルな見るなんて。にしても、身体だるいなあ。昨日、何かしたっけ？

とりとめのない思考の世界に遊びながら、目覚まし代わりのケータイが『新世界より』を盛大に唄いはじめるのを待つ。

でも、いつまでたってもあの重層な旋律が奏でられる気配はない。なんか、変だ。

今日の1限は遅刻厳禁な必修の英語だから、念を入れてアラームかけまくってるのに、なんで鳴らないんだろ・・・実はもう鳴ってたのに、目え覚めなかった、とか？

脳裏に思い浮かんだ、本当にありそうな（実は何度かしかした）事態に戦慄を覚えて飛び起きる。

枕元に伸ばした手が、違和感に気づく。

朝はそこに置きっぱなしのはずのケータイが、ない。

あわてて辺りを見回して、あたしは凍りついた。

ガラスをなくした窓が、所在なさげにたたずんでいるのが目に映

って。

起きあがったばかりの上半身が、ぐにやりと敷布団に崩れおちる。

あたし貧血の気でもあったっけ？

てか、これ。あの夢の続き？

頭のなかを、クエスチョンマークがぐるぐる回る。

自分の眼が信じられないのは・・・信じたくないのは、どれくらいぶりのことだろう。

力の入らない体をそのままに、視線だけを部屋のあちこちに送る。よくある造りのワンルームは、記憶のなかの平穏さこそが嘘のような惨状をさらしていた。

本棚と収納代わりの3段ボックスは中身をぶちまけながら床に倒れてるし、冷蔵庫の場所は壁際から30センチくらい動いてるし、その横に転がってるのは、この間買ったばかりのノートパソコンだし、その向こうの押入れの扉は空きっぱしで、中の収納もやっぱりグチャグチャだし。

うん、それだけならまだ、ああ地震でも起きたのか、で済んだのかもれない。

いや、済むはずないけど、でもそれだけの方がまだマシだったんじゃないかと思う。

だって、割れた皿の破片と引き裂かれた（としか思えない）本の残骸が、茶色い床のあちこちに白く散らばってるとかマジありえないじゃん！

付け加えるなら、いつもパソコンやノートを山積みにしてる机の上の付箋だらけの分厚い本・・・あれってサバイバルマニュアルだし。

確か、本棚の奥にしまいこんでたはずなのに、どうしてあんなところにもっちゃ丁寧に置かれてるんだろ。

つか、あのパソ、なんか叩き壊されてない？ 気のせい？

理解力の限界に挑戦するかのような惨状を、直視しつづけることが出来なくなつて窓の方に視線をやる。

窓枠の向こうがわに広がってるのは、澄みきつた青。

その、場違いなまでの清しさに、惹かれるように足を向けた。相変わらず散乱している硝子の破片を飛び越えて、ベランダに出る。

あれ？

駅前の高層ビル、どこにいったんだろ・・・

窓から見える景色に違和感を覚える間にも、無音の世界に漂う異臭が鼻をついた。

雨でも降つたのか濡れたあとのある視界の中に、人の気配はない。それどころか、車の走る音とか、登校中の子どもの声とか、「ご町内のみなさま」ってスピーカーの音とか、そんなのが何一つない街は、不気味でしかたがないくらいにしんとしている。

なんていうか、映画とかテレビとかならよくありそうなシチュエーションに、一体どんな顔をすればいいのか分からないまま、あたしはよろよろと後ずさつた。

そのかかどに何かが触れて、身体がはねる。

そろそろと振り返ってみれば、入学祝いにおばあちゃんがくれた腕時計がコンクリートの床の上に落ちてるのが見えた。

すつごく大事にしまつてたはずなのになんで、こんなところに落ちてんの？

首をかしげながら、右手を伸ばして、文字盤のところをそつとつまむ。

瞬間、指先に鋭い痛みを感じて、思わず時計を取り落としていた。ひっこめた右手の人差し指を見れば、小さくてとうめいな破片が刺さっている。

反射的に抜いた後で、それは文字盤を覆っていたガラスの破片な

のだ、ということに思い至った。

「……」

プクリと盛り上がった血が、じわじわと指先を侵蝕して伝い落ちる。

夢……だよ。痛いけど。

こんなにリアルだけど……、ゆめ、だよ。

ごまかしようもないことは分かっているながら、何も考えたくなくて恐る恐る伸ばした手で、あたしは今度こそ腕時計をもちあげた。覆いのなくなった文字盤の中、それでも動いている短針と長針。その背後にぜんまいじかけで表示されてるのが、今日の日付。

「え……？」

思わず、口からこぼれたのは、やっぱり疑問形だった。だって。

腕時計が示している日付は、私が知っているそれより7日も先の、
”未来”だったのだ。

3・The real・

気づいたときには、笑っていた。

笑える状況でも気分でもないはずなのに、笑いつづけていた。

そうしていたら、指先の痛みが消えて、時計の日付が巻き戻って、視界がフェードアウトして・・・いくなんてことが起きるわけはもちろんなく。

壊れた世界は壊れたまま、ただ鮮明にそこにあり続けていた。

不意に、戦慄が背筋を貫いた。

ベランダを吹き抜ける風にすら足が震える。

何かにすぎらなければ、立っていることすらできそうになくて、文字盤がむきだしの腕時計を握り締めた。

てのひらに金具が喰いこむ痛みはやっぱ鮮明で、あたしは受け入れざるをえなかった。

これが、悪い夢なんかじゃなくて、現実なのだということを。

打ちのめされた気分のまま部屋の中に転がりこんで、窓に背を向けたらもう、へたりこむことしかできなかった。

のろのろと姿勢を変えて、腕時計を握りしめたままの手を胸に押しつけて、もう一方の手で膝を抱く。こんな状態になっても動いている時計の音に、おばあちゃんを思いだして息を吐いた。

ぼんやりと床をさまよっていた視線が、右足のそばに投げ出された、政治学のテキストのところで止まる。

正確には、薄萌黄色の本それ自体じゃなくて、その下からのぞくクマのストラップに。

『青って勉強運アップするらしいよ。センター試験、一緒にがんばろっね』

脳裏をよぎった親友の、ミサキの声に苦笑いがこぼれた。

掲示板の前で互いの合格を祝ったのが、もうずっと前のことみたいだ。

このクマをもらったあの日から、まだ一年も経ってないのに。

青いガラス玉を抱えて本のかげに転がっているクマの、ミサキの笑顔によく似たのんきな顔つきになんだかほっとして、あたしは膝を抱えていたほうの手を伸ばした。

時計をそつと膝に落として、空いた両手でクマを握る。

ふわふわな感触に顔をゆるめかけたそのときだった、腕に何か硬い物が当たってることに気づいたのは。

4・Life line・

クマの頭からのびる紐の先、腕のすぐそばでぶらぶら揺れてたのは、新機種に変えたばかりのケータイだった。

祈るような気分で、折りたたんだままのダークレッドの機体を手取る。

誰かに、誰でもいいから、誰かに。連絡がつくならそれだけでいい。

これがまぎれもなく現実だとしても、こんな酷いことになってるのはここらへんだけかもしれない。そうにちがいない。

ここは日本だ。警察だって、消防だって、自衛隊だってある。

こんな大惨事なんだし、マスコミだって来るかもしれない。

この情報社会で、これだけ大きな町がこのままほっとかれるわけ、ない。

だから、パニくる理由なんて一つもない。

自分に言い聞かせるように呟いて、いつものように電源を押す。

真っ黒な画面を食い入るように見つめながら、それでもう大丈夫だ、と息を吐いた。

もっと早く、こうすればよかったんだ。

・・・だけど、そう都合よくはいかなかった。

黒い画面は真っ暗なままで、起動音がわりの鳥の声すら流れない。

「・・・充電切れ、かあ」

呟くともなく呟いて、コンセントに差し込みっぱなしのプラグにつなぐ。

充電の赤いランプさえつけば、いつだって通話ができる。

から元気だということは自分でも分かっている、あたしは笑った。

そうでもしていないと、どこかが折れてしまいそうで、おかしくもないのに笑いながらケータイをじっと見つめる。

・・・どれだけ待っても、充電ランプは点らなかった。

カシャン

時計が膝から滑り落ちた音に、立ち上がった自分を知る。

気づいたときには、部屋の電気のスイッチを何度も何度も押しつぶけていた。

カチ、カチ、カチ、カチカチカチカチカチ……

虚しく響く音の冷たさに叫び出しそうになりながら駆けよったブレーカーは、落ちたりなんかしていなかった。

電気代、口座からの引き落としなんだから。

だから、電気が止まるはずはない。

ブレーカーが落ちてないんだから停電ってわけでもない……

ぐるぐると回る思考とは逆に、身体が崩れ落ちる。気づいたら、

開けっ放しの扉からお風呂に倒れこんでいた。

ちょうど見上げる形になった蛇口に、なんとなく手を伸ばす。

服を着たままなのは、常識的に考えればおかしいことなんだけど、今はそれすら気にならなかった。

ただ、カランをひねって。愕然とする

水は、一滴も落ちてこなかった。

がくりと首が下がって、視線が床に向かう。

……かわききった、床に。

「まさか……」

のろのろと部屋に戻ったあたしは、一つしかないガスコンロのつ

まみを回して、ついでにシンクの蛇口もひねって、呆然と、首を横に振った。

ライフラインの、断絶。

誰かの叫びが、遠く聴こえた。
あたしの声だった。

5・Rubble・

いくつかの希望にすぎることでなんとか保っていた、理性だとか冷静さだとか、そういうものがぶつりと切れてしまえば、後に残るのは半狂乱の自分だけだった。

わめいて、叫んで、手当たり次第にそこらじゅうのものを投げまくって、それでもどうにもならない気持ちだが、あたしを部屋から飛びださせた。

ウンともスンとも言わないエレベーターを諦めて階段を駆けおりて、瓦礫におおわれた道を走る。

どこに行こうとしてるのか、考える余裕なんかなかった。

どこを走ってるのかすら、いつものようにはつかめない。

だって、景色も空気もいつもと違う。

どうちがうのか、は。考えられなかった。

何かを意識することにさえ耐えられなくて・・・何も、考えたくなくて。

あたしは、とにかく走った。

目の前のすべてから、逃げ出したかった。

だけど、運動不足の体はすぐに音をあげた。

血の味が口の中に広がり、ぜいぜいと鳴るのどから気管がむせこむような痛みを訴える。

呼吸ができなくなったあたしは、崩れるように足を止めた。

見覚えがないようで、ある場所。

そこには、大きな穴が在った。

「……っ……」

呼吸の苦しさを忘れて、あたしは茫然と立ち尽くした。

だって、ここには二階建ての小さなアパートがあるはずなのだ。
その2階の端には、いつも洗濯物がかかってて……。

『さきっちはあれだね～。きれい好きだね～』

『ん？ つてもたかがしれてるっしょ一人暮らしだし。クラブの
ユニフォームがなきゃもうちょっと減るんだけど』

苦笑して、クッキーを口に放り込んだ親友が……美咲が住んで
るはず、なのに。

「……さき！ みさき！ いないの！？ 美咲！！」

思わず、叫んだ。

叫んで、叫んで、叫んで。

でも、美咲の声どころか、誰の声も聞こえなかった。
往来で、叫んでるのに。

このアパートの周りは古くから建ってる家が多いから、こんな叫
び方をしたら誰かが、それこそ隣の口うるさいおばさんとかが、注
意してくるはずなのに……それも、ない。

思考が止まった頭で、あたりを見回す。

瓦礫、瓦礫、瓦礫

……そして、穴と黒焦げの廃墟。

「……っ……」

6・Nobody there.

気づいた時には、夕方の薄暗さが辺りを包んでいた。

だるい身体を起こすのをあきらめて、目だけで辺りを警戒する。

なんのことはない。そこは、あたしの部屋だった。

床の上に丸まっていた体を寝返りの要領であおむけにしようとして、軋むように痛む体に眉をしかめる。

体の下になつていたせいか感覚の麻痺した右手をなんとなく見やれば、ケータイから引きちぎったらしいクマのストラップが握り締められていた。

見れば、その手も腕も傷だらけで泥だらけだった。

自分がどうやって帰ってきたのか、よく分からなかった。

記憶は、大きな穴の前で叫んだところで途切れている。

ただ、誰にも出くわさなかったことだけが、奇妙に頭に残っていた。

そう。

かろうじて残っていたコンビニにも、交番にも、学校にも、病院にさえ。

だれも、いなかったのだ。

ぶるりと身体が震えた。

部屋に渦巻く寒気に耐え切れなくて、布団に寝転がる。

6月も半ばをすぎたのに、どうしてこんなに寒いんだろう。

体中から暖かさが抜けていくような気がして、目を閉じることすらできずにあたしは身体を丸めた。

少しずつ痺れてきた右手がにぎったままのクマの感触と、左手のすぐそばに転がった腕時計の音だけが、妙にリアルだった。

ぼやけかけた視界に白い色が映る。

布団のすぐそばに投げ出されていた箱のようなそれは、よくよく

見つめていればラジオ以外の何ものでもなかった。

買った覚えのない携帯型のラジオに、あたしは震える左手をそっと伸ばした。

「・・・何年ぶり、だろ。」

ラジオに触れるだなんて。

期待と、不安。

半分ずつの指先で、スイッチを入れる。

ノイズ、ノイズ、ノイズ・・・

忌々しさに衝き動かされるまま、左手がラジオをつかんだ。

窓の外にでも放り投げてしまおうとして、持ち上げたところで思い直す。

・・・情報源に、なりうる物だ。

こんな簡単に、壊してしまっていていいわけが、ない・・・

思いながら、できうる限りそっと、ラジオを床に置く。

こんなときばかり常識的なことを考え付く自分が、馬鹿らしくてならなかった。

「ハ……アハハハハハッ」

乾いた笑いが、体を支配する。

無意味さが、私をとらえて離さなかった。

部屋の外の惨状を思えば、もうできることなど何一つないような気がして。

壁に体を預けたまま、止まらない笑いに身を任せる。

電話はつながらなかった

電気もガスも水道も止まっていた

街は壊れ果てていて、そして誰もいなかった

・・・こんな状態で、何をすればいいのかなんて、教わった覚えがない。

どれくらい、そうしていたのか。よく分からなかった。

のどが嚔れても笑いつづけていたあたしは、床に転がる空色にふと視線を止めた。

色が気に入ってこないだ買ったばかりの、てのひらサイズのメモ帳。

開いた形のまま投げ出されたそれをぼんやりと手にとって、なんとなく、文字を追う。

・・・あたしの、字だった。

いつもどおりの悪筆は、汚いを通り越して解読不能の域に達しかけていた。

乱れきった筆跡は、不安を煽るばかりだったけれど、読むのをとめることなんてできずに、とにかく文字を拾う。

「……戦争」

テレビの向こうの有識者が、それ見たことかと振りかざすような映画の中で、登場人物が好んで口にするような。

非現実の象徴でしかなかったその言葉が現実を侵蝕していることを信じられず・・・信じたくなくて、あたしは何度も何度も、メモを読み返した。

なんらかの理由で、戦争が起きたこと。

どこか分らない国による、爆撃や空襲が始まったこと。

大都市圏が狙い撃ちにされたこと。

政府の機能が失われたこと。

核も・・・使われた、らしいこと。

分かったことはそう多くもないのに、すべてのベクトルが絶望の方を向いていて。

ページを捲れば捲るほど情報の錯綜が目立つメモが、少しずつ壊れてゆく世界の縮図に見えた。

7・It doesn't concern me.

その日から幾日かのほとんどを、部屋から出ずにすごした。

マンションの3階の角部屋は、窓ガラスがないのを考慮に入れても外や他の場所よりは安全な気がしたし、たった3ヶ月とはいえ住み慣れた場所から動きなくなかったから。

・・・そんなの、後から適当に正当化しただけだってことは自分でも分かった。

実のところあたしは、単に引きこもっただ。

これが現実だと、どうしても認めたくなくて。

さいわいなことに、と言っていいのかどうか知らないけど、雨が降る気配すらなかったから、開きっぱなしの窓は問題にならなかった。

ライフラインが断絶したままの不便さにも、すぐに慣れた。

普段から自炊をあんまりしてなかったのと、水道の水よりはペットボトルの水を利用してたつてもあるのかもしれない。

あたたかいお茶とかが飲めないのは堪えたし、お風呂に入れないのはともかく、トイレの水が流れないことに気づいた時にはうろたえたけど、マンションのすぐそばの河から水を汲んでくればいいのかと思えばそうたいした問題でもなくなつた。

とにかく何かをしてないとひっきりなしに襲ってくる不安や恐怖に喰い殺されてしまいそうだった。

朝がきて目が覚めてしまったびに、しゃかりきになって部屋をかたづけて、布団を干したりなんかして、だけど夕方には感情が爆発するままに散らかす。

その繰り返しで、時間はすぎた。

そうして今。

布団だけが聖域のように綺麗に保たれた部屋の中で、空っぽ同然

な冷蔵庫をのぞいて、あたしは途方にくれていた。

買い置きしていたお菓子も、健康食品の類も、ペットボトルの水さえ尽きてしまったからだ。

災害時のセオリーって言ったら、『三日間だけ自分でどうにかしてくださいね。その間に態勢をととのえて国が救助に向かいますから』じゃなかったつけ。いや、それは一度も生で見たことがない国会議事堂や総理大臣やそれから防衛省とか警察とかが無事な場合であって、国自体が終わっちゃったら意味ないのか。

・・・首都圏って戦争の時には一番最初に狙い撃ちされるんだよね。

そんなことをつらつら考えながら、寝ところがって天井をぼんやりと見上げた。

思い出すまいとしてきた、数日前の光景が脳裏をよぎる。

ゴーストタウン。

警察も、病院も、消防も、機能しない街。

街が壊れたあの日から10日以上は経っているのに、救助が来る様子はない。

これからも来ないんじゃないか、と思う。

「・・・そっか」

あの日、世界は終わったんだ。

ぼんやりと、あたしは思った。

世界の終わり。

世界が終わった後の世界。

そんなこと、誰が想像するだろう。

たとえば、紀元前4000年前。エジプトはペルシアに征服されて滅んだ。

広大な土地を支配していたローマ帝国は、395年に分裂した。618年。中国の隋は農民の反乱で滅亡した。

そのあとに起こった唐も、300年後には滅ぼされた。

同じ頃にアラビア半島を支配していたイスラム帝国だって、1258年には滅んだ。

世界史選択だったから、滅んだ国の名前や戦争の名前だけならいくつもそらで言える。

そんな遠い過去じゃなく最近だってソ連が崩壊してるし、戦争や紛争だっていくつも起こってる。

第一次世界大戦、第二次世界大戦、インドシナ戦争、スリランカにおけるタミル人の独立闘争、朝鮮戦争、4度に及ぶ中東戦争、中国の内戦、アルジェリアの民族解放戦線の独立闘争、チベット暴動からはじまる中印国境紛争、ヴェトナム戦争、イラン＝イラク戦争、湾岸戦争、セルビアの内戦……。

思い出しながら折りまげる指はすぐに足りなくなつて、あたしは腕ごと手を床に投げ出した。本の角にでもぶつけたのか、指先が強く痛んで、それがいつそ心地よかった。

だって、今思い出したのは全部、世界史の教科書の中の話でしかなかったのだ。

いつだったかどこかの国で戦争が起きた時だって、試験範囲がまた増えるなあ、くらいにしか思えなかった。

日本海に爆弾が落とされたのだって、遠い話だった。

テレビの向こうじゃ識者と名乗る人たちがいろんなことを言っ

たけど、それはやっぱりテレビの向こうがわの話で。

こちらがわのあたしには、何の関係もなかった。

あたしの周りの世界は、そんなこと関係なく、受験だとかはじめの1人暮らしだとか、明日提出のレポートだとか、とりたい資格だとか、そのうち来る就活だとか、親友と遊ぶことだとか、そういうものでいっぱい、戦争だとか国だとかが絡む余裕なんてなかった。

・・・なかった、はずだった。

ノートには、戦争が起きたと書かれていた。

目を覚まして窓の外を見たあの日、世界を覆っていた爆音と閃光はつまり、どここの国からかは分からないけれど、戦闘機が飛んできて爆弾を落としていったからだっただろうか。

だって美咲の部屋、跡形もなく吹っ飛んでた。

・・・あそこにも、何か大きな爆弾が落ちたのかもしれない。

周りの瓦礫は、そのときに生まれたのかも。

びっくりしたろうなあ・・・

いつもどおりの朝をはじめただけなのに、世界が終わっちゃうなんて。

・・・ううん、もしかしたら美咲はちゃんと逃げられたのかもしれない。

誰もいなかったのはみんな避難してるからで、あたしはうつかり取り残されちゃっただけだったりして・・・

あとからあとから浮かんでき、とりとめのない思いに翻弄されるまま、あたしは横たわっていた。

この町に何が起きたんだろ。

どうして、誰もいないんだろ。

これから、あたしはどうすればいいんだろう。

答えのない問いかけだけがぐるぐる回る。

そのうちに夜が来て。

いつのまにか眠っていた。

8・Out of the room・

目が覚めたら・・・別に何も変わってなかった。

ただ、目やにでまぶたやまつ毛がパリパリになってる顔を洗いたくなって、水道の蛇口をひねってから水が出ないってことを思い出した。

身体に染み付いた癖でいつの間にか開けていた冷蔵庫の中が空っぽなのを見て、何気なくそうしていた頃のように、ごく自然と思う。買い物に行かなきゃ。

思ってから、茫然と目を見開いて、あたしは笑い出した。

考えてみればここは街中で、コンビニだって自動販売機だってスーパーだってある。

食べ物の調達なんて、考えこまなきゃならないほど難しいことなんかじゃない。

・・・外に出さえるなら。

うん、外に出よう。

決めた途端に気が軽くなった自分の現金さに苦笑しながら立ち上がる。

空腹のせいで貧血でもおこしてるのか微妙にぐらつく視界の端、本棚の下にいつもの布バックがうずもれてるのが見えた。

なんとかひっぱりだして、机の下から見つけた財布を投げこんで部屋を出・・・ようとして、台所と言うには貧相すぎるシンクの前に戻る。

どこかの小説の主人公になった気分でその扉を開けて、1人暮らしを初めてからこのかた、数えるほどしか使ったことのない三徳包丁を鞘ごとカバンにつっこんだ。

とりあえずの、護身用に。

マンションの入り口の扉を開けた瞬間に、マスクをつけてこなかった自分にひどく後悔した。

次の瞬間に、必要なのはうちの救急箱に常備してあるようなちやちな花粉用のマスクじゃなく、鼻栓とか空気浄化装置とか、はたまた毒ガス用の軍事マスクなんじゃないかと思う。一般家庭にそんなものがあつたら驚きだけど。

あたりにたちこめていたのは、今までかいたことのないような異臭だった。

タイヤとかゴム製品が焼け焦げたような臭いとも、キャンプファイヤーの後のくすぶるような臭いとも、焼肉屋さんから路上にたれながされるむせかえるような肉の焼けるあの臭いとも、酢を鼻の中に突っ込まれたような刺激臭とも言えるような、そのどれともつかない悪臭。

こみ上げる吐き気に、あらがう気力はなかった。

のどを刺す痛みと、こみあげる酸っぱい液体と、吐き出した物の臭いに、涙目になりながら膝をつく。

視界に入った吐しゃ物は、透明に近い液体ばかりだった。

ろくなものが入ってない胃から逆流するものなんて、それこそ胃液くらいしかなかったらしい。

ひとしきり吐ききってから、蹴飛ばしたそこらへんの瓦礫で痕を隠す。

口をゆすぎたくてしかたなかったけど、そうするための水はここにはない。

だからあたしは、とりあえず歩き出した。

見上げた空は、いつそ清々しいほどの快晴。

風がゆるやかに吹く道は、散歩に最適と銘打たれそうなほどの穏やかさをかもしだしている。

肌にまとわりつく臭いと、空をギャアギャア旋回するカラスを考

えに入れなければ、だけれど。

カラスが巢食っている道を避けて、一番近いスーパーまで歩く。
もしかしたら、普通に営業してるんじゃないかな？

期待に、足が勝手に速度を上げた。

ほとんど倒壊したビルが並ぶ大通りを駆け抜け、焼け焦げたお寺の横の道を通り過ぎる。

そうして、商店街のはずれにあるスーパーにたどりついたときには、あたしはもう汗だけで、息も絶え絶えだった。

9・rationalization.

スーパーは、奇跡的に何の被害も受けていないように見えた。ガラスも割れていなければ、屋根が焼け焦げてるわけでもない。それに少しだけ安心して、緊張を少し緩める。

けっきょく、誰にも遭わなかったなあ

厳戒令とか出てたらどうしよう

・・・ていうかこの日本でそんなの出るのかな

ぼんやりと脳裏をよぎった思考を、考えなかったことにして自動ドアではない扉を押し開ける。

そう広くもない店内は、電気がついていないせいかだいぶ薄暗かった。

少しずつ暗がりに慣れだした目がとらえた光景に、あたしは茫然と立ち尽くした。

・・・どうということだろう、これは。

整然と並んでいるはずの商品棚が、床に折り重なるように倒れている。

なんとなく、人為的な痕跡を感じて、身体に震えが走った。

鮮魚売り場や精肉売り場、野菜・果物売り場にむらがつてるあの黒い塊は、ハエだろうか。

もう慣れきってしまったはずの異臭が、改めて鼻を刺した。

何も考えたくなくて、あたしは淡々と、買い物カゴをカートに乗せた。

ハエのかたまりに近づく気にはなれなかったから、記憶どおりなら飲み物が陳列されているはずの棚のほうへ向かう。

そこは、思っていたよりはずっと、いつもどおりで。テレビで見た大停電のときのアメリカのスーパーマーケットみたいに、商品が強奪されて荒れ果てているんじゃないかと思ってただけに、拍子抜けした。

それでも、おなじように考えた人がいなかったわけではなかったらしく、大安売りのときでもそうはならないほどには棚は空っぽだった。

わずかに残っていた水のペットボトルを一つ手にとって、衝動に突き動かされるまま、口を開ける。

お店の中で物を・・・それもお金を払ってすらない商品に口をつけるなんて、そんなはしたないことを自分がすることになるなんてこれまで思ったことがなかったのに、一度口をつけたらもう、止まらなかった。

口をゆすぐだけにして、外で吐き出してこうよと思った一口目さえ、もったいなくてはきだせずに。

そのまま500mlを1本飲み干したところで、あたしはようやく息をついた。

久しぶりに、人心地がついたような気がした。

少しだけ落ち着いた頭が、水はもちろんのこと、コーヒーだとか炭酸飲料だとか、とにかくありったけのペットボトルやレトルト食品や、缶詰や、チョコレートなんかをカゴに入れて、それからふと思いついて、隣の“夏のキャンプ特集”と銘打たれたコーナーに向かう。

思ったとおり、そこには携帯用のガスコンロとガスボンベがあった。

自炊をあんまりしなと言っても、何かを暖めるのにコンロは欠かせない。

あまり意識していないところで台所を利用していたことも、この数日で実感していた。

棚が倒れている場所を避けて、そろそろとカートを進める。

カートの上下の二つのカゴは、必要そうなもので既にいっぱい、一歩足を進めるのもしんどかった。

こんなたくさんの買い物をするのはどれくらいぶりだろう。

お金足りるかな、と心配して。

その心配の無意味さに笑った。

人もいない、監視カメラの電源だっておそらく切れてるこの店で、お金を払うことにどんな意味があるっていうんだろう。

そう思いながら、いつもの癖でレジを通る。

レジスターの電源もやっぱり切れているらしく、見よう見まねで金額を算定してお金を置いていくなんてこともできそうもなかった。なのに、レジの上にくいくばくかのお金が置かれているのが見えて、あたしは自分の醜さに涙が出そうになった。

どうしようか迷って、結局お金は置かないまま、ずっしりと重いカートを押して店を出る。

生まれてはじめての万引きに、きよろきよろと辺りをうかがって、その滑稽さに笑った。

いつそ、誰かに見咎められて、警察に捕まってしまうたらいいのに。

思いながら、のろのろとカートを押す。

照りつける日差しの下を瓦礫をよけながら進んでいくのは結構めんどくさかったけど、久しぶりにまっとうなご飯が食べられる予感に、心はウキウキとはずんでいて。そんな自分を殴りつけてやりたいうような気がした。

部屋にもどってからは、大仕事だった。

荒れ果てた部屋をおさなりに片付けて荷物を置くスペースを作るのも、ペットボトルやら何やらを持って階段を登るのも、帰ってきたものを整理して片付けるのも、カートを非常階段の下に隠すのも。

ぬるくてなんともいえない味になった炭酸ジュースをちよつと飲んだりしながら、だましまし荷物運んで、なんとかぜんぶ終わった頃には窓から夕陽が見えた。

本当なら、向こうがわに立っていた高層ビルのせいで見えないはずの夕焼けを横目に、あたしは何かをやり遂げたような気分で笑った。

こんなに体力を使って、こんなに汗をかいたのは久しぶりだった。高層難民だったら、もっと大変だったんだろうなあ。なんとなく思いついて眉をしかめる。

3階のこの部屋ですら、ここまで苦労したのだ。これが50階だとか100階だったら、と思うだに冷や汗がでそうだった。

一生そんなところには住むまい。

それから、ガスコンロを部屋の真ん中に設置して、説明書を斜め読みしながらガスボンベをセットした。階段を登っているときに、何度目の前が暗くなったのかよくわからないくらいには貧血気味で、おなかが減っていた。

この日を皮切りに、あたしはあちこちから物を盗んでくるようになった。

スリルも何もない、単なる生活の一部として。

たとえば、それは、トイレトペーパーだったり、水のいらないシャンプーだったり、気になってた本の続きだったり、はたまた自転車だったりした。

誰もいないから、非常時だから何をしてもいいわけではないことは分かっているつもりで、でも、他にどうしていいか分からなくて罪悪感の合理化の前に屈服した。

一度、ケータイの充電器を盗んできたこともあった。

だけど、電源の入ったケータイは、どうしてだか圏外表示のまま

あたしは2時間かけて探し出したケータイを、部屋の隅に放り投げた。

それでも。

はじめて行ったスーパーが、見事に荒らされてたから、もしかしたらあたし以外にも誰かいるのかもしれない、と期待しながらおびえたけれど。

生きている人にでくわすことはまったくなかった。

護身用に包丁をもって歩くのも、じきにやめた。

部屋まで漂ってくる異臭にも、そのうち慣れてしまった。

人は、こんな風に適応していくんだなあ、と。

それがひどくおかしかった。

10・Half awake・

ぼんやりと。あたしは寝転がっていた。

昼下がりのこの時間、窓のすぐそばのここは、おひさまの光が少しだけ差し込んでくる絶好のお昼寝スポットなのだ。

というのは、一週間前にスーパーから戻ってきて荷物を整理していたときに、ついでにガラスも片付けてゴミ捨て場に捨ててたおかげなんだけど、まあどうだっていい。集積車がこないからゴミ捨て場にたまっていけばかりのゴミとおんなじくらい、どうだっていいことだ。

見るともなく眺めた空は、あの日のように煙が立ち上っているわけでもなく、嘘のように青い。

嘘のように・・・、そうだ何もかもが嘘なのかもしれない。

あたしは、わけの分からない悪夢を見ているだけで、本当はもうすぐ目覚ましのベルが鳴るのかも。

とりとめなく考えながら、あたしは寝返りを一つうつて窓から目をそむけた。

「……おふろに、入りたいな」

空の青さに思いだしてしまった光景を忘れたくて、ある程度は適当な、けっこう切実な思いを言葉にする。

こういうときに水の貴重さを思い知るのは、ドラマじゃなくてもお約束らしい。

もうずっとウェットティッシュとか水のいらないシャンプーとかで凌いできたけど、そろそろ限界だった。

手が届かない背中が暗黒地帯と化してる気がする。

腰まであった髪を、べたつく感触のうっとおしさに負けてザンバラに切ってしまったのはもう何日も前のことだ。

どこまでも落ちこみかねない気分をごまかすように、タケノコのように積み上げた本の山から適当に文庫本を引っ張り出す。

表紙をパリりと捲ってみたけれど文字を目で追う気にはなれなかった。

いいかげん、読書にもうんざりしていた。

だって、このところ本を読んではかりだったのだ。

児童書から雑誌まで、時には辞書や参考書にも手を出して。

ちよつと難しいパズルに頭を使ったり、お姫さまのその後にドキドキしたり、おもしろおかしく笑ったり、知らなかった言葉に感心したり・・・でもそれは、時間を潰すための無意味な時間にしかなりえなかった。

だいたい、連載中の漫画の続きはもう読めないのだ。

ふつと、昨日の昼のことを思い出してあたしは笑った。

そつえば昨日も、こんな風に本を読んでいた。

おんなじように読書にうんざりして、誰でもいいから誰かと話しくなつてぬいぐるみに話しかけた時点でずいぶんやばかった気がする。

日課のようにラジオのスイッチを入れても、響くのはノイズばかりで。

自分が、生きてるのか死んでるのか、よく分からない心地で包丁を握った。

これで、のどでも掻っ切れれば分かるかな・・・

しばらくそうして鈍く光る包丁の先を見つめてた気がする。

結局、痛いのはイヤだ、と壁際に放り投げただけだ。

・・・あの時読んでたのが、シリーズものの小説でなかったら、危なかったかもしれない。

回想した昨日の自分の遠さにため息をついて、本をほつる。
バサリ。

本の山がまた少し崩れたのを見るともなく見つめながら、少し笑った。

ほんとうに、どうしてあたしは生きてるんだろう

誰もいないこの街で、物を盗んで、ただ毎日を作り過ごして

・・・そこまでして、生きる意味なんてどこにあるっていうんだ
ろう

何度も考えたことが、また頭をよぎる。

このまま、部屋にこもっているばかりじゃどうにもならないこと
くらい、分かっていた。

でも、どうにかする方法なんてカケラも思いつけなくて、虚無感
に襲われるままごろりと床に倒れこんだ。ぬるく温まったフローリ
ングの床に、全身をかきむしりたくなるような気持ち悪さを覚えて、
ごまかすように床に手を打ち付ける。

ジンとした痛みにはっと息をついて、その手を引き寄せようとし
たそのときだった。

指先に、白いラジオが触れた。

考える前に、指が動く。

期待の欠片もないまま、ただ、チャンネルをいじった。

「……ザアアア……ま……アザアア……って……」

唐突に飛び込んできた音に、息を呑む。

それは、確かに人の声だった。あたし以外の、誰かの。

あわてて、体を起こして、まだ痛む指でチャンネルダイヤルを少しずつ回す。

なんだってこんなに手が震えるんだろう。

あたしはこんなに不器用だったろうか。

焦燥に追われながら、それでもなんとかチャンネルを合わせられた、と思った瞬間。

放送はあっけなく途切れ。

あたしはぼうぜんと、ラジオを見つめた。

ノイズ、ノイズ、ノイズ……

半狂乱の中で、あたしは耳を押し当てるようにラジオを聴きつけ。

そうして、垂れ流されるばかりの雑音にいらついで、壁を何度も叩いた。

白昼夢だとは、思えなかった。

どうしても、思いたくなかった。

それでも、ラジオはもう人の言葉を喋らなくて。

その残酷さにあたしは泣いた。

泣きつかれたまどろみの中、夢だとすぐに分かるような、陳腐な夢を見た。

薄曇りの空の下、妹の暁子をつれて遊びに行く。

歩いて歩いて、ようやく公園にたどりついて。

錆びかけたブランコに、暁子に乗せた。

その瞬間、地震が起きて池の水位が上がって、逃げ切れなかったあたしは水にのまれた。

もがきながら、妹を見る。

高く高く空を舞うブランコに、少しでも安心して目を閉じて。

ブラックアウトした視界が明るくなったかと思えば、そこは実家だった。

死んだはずのおばあちゃんが、コタツの向こうから笑う。

もうすぐご飯よ少しは手伝いなさい、とお母さんが怒る。

暁子の隣で、お父さんが新聞を読んでいる。

いつもどおりの光景。

そう思ったときに、目が覚めた。

顔中、涙でバリバリな自分に、笑いが起きる。

何を、いつもどおりだと思ったのか、よく分からなかった。

だって、こんな陳腐なホームドラマみたいな夢。

おばあちゃんはもういない。

高校に入ったばかりのころに、遠くの老人ホームに入ったつきり会っていない。

ミキは、もうあんなに小さくない。

お母さんは、あんなふうには怒らない。

お父さんは、夕ご飯の時間に家にいたためしがない。

なのに、なぜだか懐かしくて涙があふれて止まらなかった。

泣けて泣けてしかたがなくて。

しまいには、何が夢で何が本当で何が偽りなのか、区別できなくなってしまうた。

・・・そろそろ、頭がおかしくなってきたのかもかもしれないなあ

思いながら、手を伸ばした先に、白いラジオ。

ウンともスンとも言わなくなっていることに慌てて、電池を入れ替える。

どうやらつけっぱなしにしたまま眠ってたらしい。

改めてノイズを吐き出しはじめたラジオに、どこまでが現実ほんとうだろうか、と手の甲をつねる。

痛みだけが、あたしを確かめる。

その惨めさに息をつきながら、ラジオのチャンネルダイヤルに伸ばした手を止めた。

白昼夢だったのか、それとも現実だったのか。よく分からないけれど。

はじめて人の声が聴こえたダイヤルから、針を動かすことは、どうしてもできなかった

11. A voice over the radio.

結果から言うなら、ラジオから聴こえた声は白昼夢のたまものはなかったらしい。

何でそんなことがいえるのかというと、次の日も、そのまた次の日も、ラジオから声が届いたからだ。

あたしはもちろん狂喜した。つけっぱなしのラジオを前に、眠ることすらせずに座り込み続けたくらいに。そのうちに、声が届く時間が決まっていることにも気づいた。晴れた日の昼下がり、だいたい1時から1時半の30分。その法則を見出したのは、もう一週間ほど前のことになる。気づいてからは、その時間だけラジオのスイッチを入れることにした。電池だって、無限にあるわけじゃないのだ。

とにかく、ラジオから声が届くようになって10日ほどがすぎたわけだ。

その10日間、というよりは声が届く時間の法則を見出してから7日間で、あたしの生活はだいぶ規則的になっていた。

たとえば、感情にまかせて部屋を荒らす回数が少なくなった。その代わりといえるのかどうか分からないけれど、生活するために何かをすることが増えた。

もうこれは、日課と言ったっていいんじゃないだろうか。

朝起きて、ご飯を作って食べて片づけて川に水をくみに外に出る。ついでに道路の瓦礫を歩きやすいように動かしたりもする。そうして本を読んだり料理をしたりして、お昼が来たらラジオのスイッチを入れる。ラジオにしばらく耳を傾けて、その後はぼうつとして。夕方になる少し前に自転車で外に出かけて何かを盗ってくる。

相変わらず無人の世界は、けれど前ほどは恐ろしくなくなっていた。

他の人たちはどうなったのか、どうしてあたしは生きているのか、

なんてことは分からないままだったけれど。それでもあたしは、生活らしきものをなんとか成り立たせられるようにはなった。

空が晴れていて、お昼が来たらラジオが聴けるのだ、ということがずいぶんと支えになっているからだと思う。

声と放送の内容から推測するに、話しているのは、若い男のようだった。

彼もまた、独りきりらしい。

らしい、というのは。彼が現状を殆どと言っていいほど語らないからだ。

普通、非常時の放送って言ったら、この地域はこんな状態ですよとか、この場所に行けばこんな支援が受けられますよとか、せめて明日の天気だとか、もっと有益な情報を流すのがセオリーなんじゃないの。

ぼやきかけた言葉をため息に変えたのは、放送を聴きはじめて2日目のことだった。

・・・きつとこの人も、どうしたらいいのかわからないんだ。

そう気づいてしまってから、男の他愛ない言葉にのめりこむようになった。

たとえば、今日の空の色とそこに浮かぶ雲の形。

たとえば、小学生だったときのささやかな冒険。

たとえば、一ヶ月前に読んだ小説のあらすじ。

たいていの放送は、そんなどうでもいい世間話に終始した。

たまに、いつだったか流行った歌を歌うことすらあって、あたしは音程の微妙な外れっぷりに笑いながら、気が向いたら一緒に歌ってみたりした。

顔すら知らない男の言葉に、あたしは共感し、そして笑った。

こんなにも。他者の存在に餓えていたのか、とびつくりしたくらいに。

電波状況はそんなによくないらしく、ノイズが入らない日はなかったけど。

一方通行の独り言のような、いや、まさに独り言でしかない放送を、あたしは待ち望むようになっていた。

12・Walk the streets.

次の日も、その次の日も、そのまた次の日も。

毎日は平穩無事に過ぎていった。

曇つてたり雨が降つてたりしてラジオからノイズだけが響きつづけるような日には、もう二度と男の声を聴けることはないんじゃないか、と心底怖くて毛布をかぶつて震えたりもしたけど。何度かそういうことが続く中で、次の晴れた日には声が届くと信じられるようになって、あたしは徐々に慣れていった。ラジオが在って、男の声が届く日常に。

だから、油断していたのかもしれない。

・・・こんな、現実から目をそらしてるだけの穏やかな日々が、そう長く続くわけもなかったのに。

いつものように本を盗りに行つた帰り際。

あたしはちよつと浮かれ気分で自転車を漕いでいた。ペダルの重さも、そんなに気にならないくらいに。

それもそのはず、前のカゴは大量の本・・・気になっていたファンタジー小説の続きだとかそういうのが入った紙袋でいっぱいだったし、道もわりかし走りやすかつたからだ。

道。

これまで気にも留めていなかったそれが、必要不可欠な社会基盤なのだとすることを今のあたしは思い知らされていた。アスファルトで舗装された、石ころ一つ落ちてないような道。いつもそれなりにメンテナンスされて、道路標識一つでさえ整然と並んでいたあの道が、懐かしくてならない。

だって今のこの街で、そんな道におめにかかることは稀なのだ。1ヶ月前はメインストリートだったこの道も、あたりのビルがほと

んど崩れて街路樹も焼け焦げて倒れてたり炭化してたり穴があいてたりで、標識なんてカケラも残っちゃいない。はじめて通ったときは何度も迷ったし、次に通ったときもやっぱり迷った。

にもかかわらずこの道を使っているのは、道幅がある程度広かったおかげか他の道よりも瓦礫が少なくて走りやすいからだ。特に、中央分離帯のあたり。

行く手をさえぎるガラスの破片やなんやかやの山を自転車をおしながら超えるのも、もう慣れたものだった。そうなるまでに7台分くらいのタイヤをパンクさせたのは、考えないことにする。ついでに鍵を壊す腕も上がったのはあんまり嬉しくないけど、背に腹はかえられないから仕方がない。

こんな風に関き直ったのは、3台目がパンクしたときだったかなあ、と思いながらペダルを踏む足に力を入れた。

そのときだった。

道端に転がる、茶色に近い赤黒いモノに気づいたのは。

13・The stench of death・(前書き)

この章には、グロテスクな描写が含まれています。

13・The stench of death.

ブレーキをかけた理由は、よく分からない。

好奇心、だけじゃなかったと思う。

とにかく、あたしは自転車を止めてサドルから降りて、荷物が落ちないように気をつけながらハンドルから手を放した。

そのときだった。

風向きが変わって、ひどい臭いが鼻を直撃したのは。

それは、外に出たときはいつもたちこめていた異臭だった。

出所がどこなのか、直感的に悟る。

道端、と言っても、中央分離帯を示すオレンジ色のラインからそう離れてはいないところ、あたしが立っているこの場所から１メートルか２メートルくらいの場所に転がっている、“それ”。

視線を向けたことを、その瞬間に後悔した。

自転車からの流れていく景色の一部としてではなく、改めて見つけたそれは、これまでに見たこともないような黒い色と、固形とも液体ともつかない形をしていた。ひどいときは部屋の中まで漂ってきていた、体中に染みついて慣れてしまったと思っていたあの異臭が、ますます強まった気がした。

だから、余計に気になったのかもしれない。

うつん、知らないといけないような気がした、んだと思う。

１歩、２歩と、それがよく見えるところまで近づいたあたしは、その場にしりもちをつくことになった。

腰から下に力が入らなくて、立っていられなかったのだ。

視点が低くなったせいで、細い丸太にも似た“それ”が、気のせいかさつきよりもよく見えた。

腐ったミンチ、というのが一番近いのかもしれない。茶色い液体状のグチャグチャなそれには、ソーセージのような太さの肉片が何個かついていた。

それが人間の腕だと、気づいたときには吐いていた。何度吐いても止まらなかった。

出てくるものがなくなっても、胃が痙攣を起こしたかのような嘔吐感が途切れることなく続く。

うずくまったらままだ、吐き続ける身体をよそに、思った。

町中にただよう異臭はつまり、こういうこと、だったんだ。

町は、いつだってこの臭い、死臭でいっぱいだった。

なんとなく避けて通ってきた、鴉が上空を旋回しているようなところからは、きまってこの臭いがした。

それはつまり、そこで人が死んでる、ってことなんじゃないのか。こんなふうに、グチャグチャになって。

たどりついた結論の恐ろしさに、あたしは震えた。

いつそ気絶できたら、と思う。それか、せめて目をそらせたら、と。

だけど。

あたしは気絶しなかったし、凍りついたかのように動かせなくなった身体の中で目だけを動かすなんてことができるはずもなく。

グチャグチャの、指があることでかろうじて人間の腕だったと判別できたばかりの肉塊の中に白みを帯びた固体を見つけて、また吐いた。小学校の理科室にあるような、どこか胡散臭いあの作り物めいた白とは違う色と、知っている形とはまったく違うグチャグチャさが気持ち悪くてならなかった。もう胃液しか残っていなかったらしく、のどが焼けるように痛む。

世界は、相変わらず嫌味なほどに青い空の下で、異臭に包まれている。

グギヤアグギヤア

カラスが鳴く声が頭上から聞こえて、あたしははっと顔を上げた。そう高くない位置に、何羽ものカラスが旋回しているのが見えた。

とつさに、そばにいくらでも転がっていた瓦礫のひとつを掴んでいた。

投げつけたそれは、カラスの飛んでいる位置には到底届かず。

少し離れたところに落ちて、砂煙を立てた。

その音に、凍り付いていた身体の呪縛がとけて、転がるようにつんのめって、そのまま駆け出した。

自転車の方へ。

ほんの数歩に、とても時間がかかった気がした。

14・Actually feeling

必死の思いでマンションに戻って、扉に鍵をかけたあたしは、玄関の床にへたり込んだ。

とつくの昔に慣れたと思っていた死臭が、体中にまわりついて、あたしをどこか深い闇の中へ引きずり込もうとしているような気さえた。

あたしは。

何を勘違いしてたんだろう。

ここは、夢の中の世界じゃない。

勝手に泣き出した自分を、どこか遠い場所から眺めているような感覚で思う。

ここはどこだろう。

なんだって、あたしはここにいるんだろう。

何をすればいいんだろう。

どうすれば、助かるんだろう。

そもそも、助かるってなんだろう。

あたしは、何がしたいんだろ・・・

堂々巡りの思考の中に、何度も何度もあの肉片が浮かぶ。

どうみてもあれは、人間の・・・

頭を強く横に振ってみても、体の感覚は戻って来やしなかった。

あんなふうにはなりたくない、と思う。

あんなふうになってもおかしくなかったんだ、と思う。

どれだけの幸運と奇跡が、あたしにここで息をさせているんだろうか。

がちがち、と耳障りな音があたりにこだまして、あたしは歯の根が合わないほど震えている自分を知る。夕チの悪い風邪をひいた時よりよっぽど酷い悪寒が血管の中を駆け巡っているような気持ち悪さに崩れ落ちたままの膝を抱えて、何とか壁に寄りかかる。

フローリングの床も、薄い壁紙が張られただけの壁も、硬くて冷たくて、どこまでも突き放されているような気がした。

いつまでそうしてたのか、よく分からなかった。

いつまでもそうしているわけにはいかないことは分かっていたから、軋む体をなんとか起こす。その足で、よろよろと部屋の中に戻ったあたしは、体に触れた布団の手触りにただただ息をついた。

「寝よ……か」

何も考えたくなくて、着替えもしないまま布団の中にもぐりこむ。冷えきった肌に、毛布の柔らかさが心地よかった。

最近盗んできた、もふもふなぬいぐるみを抱えて、深く息をついてまどろみに落ちる。

その瞬間。

ガラスのない窓から、鉄琴を叩いた時のような音が断続的に響いた。

反射的に飛び上がりかけた体を、ぬいぐるみを抱く手に力を込めることでやりすこす。

飛び出しかけた悲鳴を必死で押し殺して、恐る恐る窓のほうを見つめた。

雨が、降り出していた。

14・Actually feeling (後書き)

はじめまして。もしくは、お久しぶりです。

この物語を読もうと思って読んでくださったあなた、
たまたま行き会って読んでくださったあなた、もう二度と読まない
ぞと思われたあなた。

あなたがそこに居てくださることが嬉しいです。

この物語を読んでくださってありがとうございます。

この続きは現在鋭意執筆中です。

ご感想・ご批評、誤字・脱字のご指摘などいただけると嬉しいです。

(明日への活力になります)

どうぞよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6535e/>

Last Days ~世界の終わりととどく声~

2010年10月10日22時21分発行